永井隆博士からの手紙

有坂　文雄

　去る八月二十二日朝日新聞の夕刊に「長崎からの手紙、次代へ」という記事が掲載されました。ご覧になった方も多かったことと思います。昭和二十四年二月、ある町の小学校の生徒達が長崎の自宅で療養中の永井隆博士に手紙を書き、その手紙に永井博士が応えて送った返事が現在まで保存されており、紹介されていました。永井博士といえば、「この子を残して」や映画化された「長崎の鐘」などを通して私どもの年代にはなじみ深く、記憶に強く残っておられる方も多いと思います。それから六十年近くの歳月が流れましたが、二十年前に、今は亡き夫から渡されたその永井博士からの手紙を、妻の上村三枝子さんが大切に保管されてきたということです。朝日新聞に載っていたのは「抜粋」とあったので、是非全文を読みたいと、朝日新聞を通して上村さんにお願いしたところ、早速コピーに手紙を添えて送って下さいました。コピーとはいえ、初めて見る博士の直筆ということもあって、感銘深く読みました。上村さんは『「汝ら互いに相愛すべし」とは神のさだめた規則であります。』という文が新聞では削られてしまっていたことを嘆いておられました。永井博士に手紙を送ったのは長野県の小学生だったことも分かりました。「久しぶりに読んだこの文章は亡き主人の遺書のようにも感じられました。」と上村さんからのお手紙にありました。

　来年は奇しくも永井博士の生誕百年になります。この手紙を皆様と分かち合いたく、以下に全文を転載させていただきます。

****

福島小学校のみなさま

　六年い組のみなさまから真心のこもったお手紙をどっさり頂いてよろこびました。私達三人の父子は幸福に暮らしておりますから、よろこんで下さい。

　人間どうしは相愛し合ってゆきさえすれば幸福になれます。

　たといどんなに貧しくても愛し愛されておることをはっきり知っておれる状態にあると全く幸福です。

　人間どうしは相憎み相争ってゆきますと、いくら自分の要求が通っても心が落ち着かずいつまでも不安です。

　世界がいま二つに分かれているとよく云われます。争いによって公平な分配をしようとするか、愛によって公平な分配をしようとするか――相手をみたらすぐ目を怒らし議論をするか、相手をみたらすぐにっこりしていたわるか――――。

　この二つのやり方のどちらをあなたは好きますか？

　きっと愛の組でしょうね。なぜならこうしてやさしい手紙を私たち南の港の者に書いて下さったのですもの。

「なんじら互いに相愛すべし」とは神のさだめた規則であります。

　どうか、あなたの町で、あなたがたはみな愛の天使として貧しい人、かなしんでいる人、困っている人、病気している人、旅の人、さみしがっている子に小い愛の言葉をかけるように努めて下さい。

一九四九年二月二八日

長崎市上野町三七番　永井　隆

福島小学校のみなさま

「付記」

中学生の頃、映画で「長崎の鐘」を観ました。４０年前のことで記憶が薄れてしまいましたが、映画の中で、永井博士が妻に自分が白血病で余命幾ばくもないことを告げるシーンと、「なぐさめ励まし長崎の、ああ、長崎の鐘が鳴る」という藤山一郎さんが歌う主題歌の最後のところのメロディーが記憶に残っています。

今回、その永井博士についての記事を新聞に見い出し、この小文を書いたことがきっかけで、当教会の小笠原啓祐氏が永井博士のご子息の誠一（まこと）氏と上智大学でご学友であったことを知りました。小笠原さんから永井誠一著「永井隆」－長崎の原爆に直撃された放射線専門医師－という本を貸していただいて興味深く読んでいます。

永井博士は学生時代から短歌に興味を持ち、アララギ派の支部の結社にも入会して歌会にも参加していたということです。

白薔薇の花の香りの立つごとく我が身を離れ昇りゆくらむ

は、博士の辞世の歌と云われています。

「永井隆博士略歴」

明治四十一年二月三日 島根県松江市に二男三女の長男として生まれる。父は開業医。高校時代は自然観察と議論を好み、唯物論の虜となる。

昭和三年長崎医科大学入学。短歌に興味を持ち、昭和五年「アララギ」支社に入会。当時、下宿先森山家の一人娘、緑からキリスト教の書物を受け取る。森山家は江戸時代、キリシタンの信徒頭をつとめた帳方の家系で、家畜仲買を営む。

昭和七年三月 長崎医大を首席で卒業。放射線医学を専攻。

昭和九年 六月受洗、霊名はパウロ。八月緑と結婚。

昭和十二年 長崎医大講師。七月 日中戦争に軍医中尉として従軍（2年6ヶ月）。中国の北から南まで第一線で七十二回の戦闘を経験し、敵味方の区別なく、負傷兵や現地住民の救護活動を行った。昭和十五年二月 帰国。

昭和二十年六月 慢性骨髄性白血病で「余命3年」と診断される。結核予防の集団検診が増加し、しかもフィルム不足のため直接透視で検査していたことから被曝したのが原因。病気をおして第十一医療隊隊長を務めたり、また、自発的に貧しい病人の無料診断を行なったりした。八月九日 原爆被爆。右側頭動脈切断、出血をおして三日間救護活動。八月十一日 自宅焼跡に帰り、緑夫人の遺骨を拾って埋葬。十二日 三山町木場に救護班を開設、約二ヶ月間にわたって巡回診療を行なう。八月十五日 終戦。

昭和二十一年一月二十八日 長崎医大教授。7月 浦上駅で倒れ、以後病床に伏す。

昭和二十三年三月 如己堂（己のごとく人を愛すの意）が建ち、移り住む。八月 長崎医大教授を休職 十月十八日 ヘレン・ケラー女史が如己堂を訪れる。

昭和二十四年五月 床についたまま長崎医大で天皇陛下に拝謁。また、教皇特使ギルロイ枢機卿の見舞いを受ける。

昭和二十五年 五月 教皇からロザリオを贈られる。

昭和二十六年五月一日 午後九時五十分、白血病による心臓衰弱のため、長崎医大で四十三年の生涯を閉じた。

病床で執筆し、「長崎の鐘」、「亡びぬものを」、「ロザリオの鎖」、「この子を残して」、「生命の河」、「いとし子よ」、「乙女峠」など、多数の著書を遺した。来年（２００８年）は生誕１００年を迎える。

「参考」　永井誠一著「永井隆」長崎の原爆に直撃された放射線専門医師　サンパウロ（二〇〇〇年）